

イラン河川灌漑地域における水配分をめぐる

生業の維持と変容からの検討

—水危機と対峙して生き抜くヴァルザネの人々—

西川 優花

2010年頃から、中東・南アジア地域における「水危機」のリスクの緊急性・重要性がかつて無い程に高まっている。本研究において対象としているイランは、もともとの水資源保有率が低く、国土の84%が半乾燥・乾燥気候に属するという地理的な条件下にあるが、そのような乾燥地に暮らす人々は厳しい自然環境に自らの生活や生業を適応させることで長い歴史を歩んできていた。しかし、近代化や工業化に伴い、都市では大気汚染や水質汚染、乾燥地農村では旱魃や水資源の枯渇、塩害や生物多様性の減少といった問題が生じている。これらの問題は全て水の問題と深く関わっていることから、イランは水危機のリスクに直面しつつあると言えるものの、それを越えてゆく具体的なシナリオは依然として描けていない。それどころか、近代化や工業化・効率化という名目のもとに蔑ろにされ、そこで培われてきた乾燥地における伝統文化や経験知は喪われつつある。

そこで本研究では、イラン・エスファハン州を貫流するザーヤンデルード川下流域の農村ヴァルザネ市に着目し、ヴァルザネ市が2000年頃から直面している深刻な水不足について、そこにおける生業や生活といったミクロの視点から捉え直すことで、イラン社会全体を脅かす水危機のリスクの全体像やそれらを齎す社会的ダイナミズムを明らかにすることを目的とした。

初めに、「水危機」のリスクが持つ特徴を整理し、イランにおける水の問題の状況について概観したが、それによって、そして本研究において対象としているヴァルザネが、水の問題に直面しながらもこれまで先行研究で指摘されてきた乾燥地農民の「流動的性質」を見せず、その地での暮らしや生業を維持しようとしていることが明らかになった。既存の先行研究の分野や対象地域の偏りやザーヤンデルード流域の地理的重要性、イランにおける水の問題の緊急性から、それを解き明かす重要性を指摘した。

その上で、既存の先行研究を精査した結果、イラン社会全体の変容がカナート灌漑によって成立してきた大部分のイラン乾燥地域農村にどのように影響を与え、農民の生業選択や水環境に関係してきたのかを時系列に沿って示すことができた。一方で、ザーヤンデルード流域およびヴァルザネに関する先行研究を精査したことで、ヴァルザネの農民が他の乾燥地域農村とは異なり「流動的性質」を見せないのは、①この地域が1960年代の農地改革以前に地主小作制の支配下に置かれたか否かに関係しているのではないかと、②ザーヤンデルード下流域という地理的条件下で育まれてきた灌漑システムや農法には地域及び生業を維持してゆく機能が存在するのではないかと、という仮説が導かれた。

上記の仮説をもとに、筆者は2015年10月～2016年5月および2016年7月～10月にかけてイランに滞在し、半構造化インタビューおよび参与観察を用い現地調査を行った。調査では主にヴァルザネの農業従事者とその家族を対象とし、調査言語としてはペルシア語を用いた。仮説①に対応すべく、地主小作制や灌漑制度に関しては特に時間を割いてインタビューを行った。その結果、

ザーヤンデルド流域地域およびヴァルザネにおける河川灌漑のシステムや水配分に関する取り決めといった人々の生活や生業のハード面について、水不足が深刻化する 2000 年前後の変容を明らかにすることができた。また、仮説①のヴァルザネにおける地主小作制の実態に関しては、ヴァルザネは他の大多数の乾燥地農村とは異なり、歴史的に大地主や大権力に支配されることなく生業を営んできた自作農村であったことが示された。これによって、ヴァルザネの農民が他の乾燥地農村とは異なり「流動的性質」を見せない要因の一つとして推察することが可能となった。また一方で、ヴァルザネの人々の生活と生業というソフトの部分における水の問題との関わりや変容について調査・分析した結果、水の問題の顕在化によって生じている富やリスクの分配の状況や心理的コンフリクトが生じている様子が見えてきたが、その一方で、ヴァルザネの人々が水危機に対峙し、主体的にリスクを分散・軽減させながらその地で生き抜こうとする姿も明らかになった。

以上の文献調査・現地調査によって、ヴァルザネが保持してきた固有性は、その地理的特殊性によって乾燥地域にありながらも自作農村として存在してきたことに起因し、それ故に他の乾燥地農村に対し優位性を持ちつつ自然環境に自らの生活を適応させながらこれまで歴史的に生を営んできていたことが示された。しかし、2000 年頃に人為的な水配分の変更が行われ慢性的な水不足に陥ってからは、むしろその地理的条件によってヴァルザネは社会的に脆弱な立場へと周縁化されてきていると言えるだろう。つまり、ヴァルザネが直面している水不足は、最早単なる干ばつや水不足といった一過性の問題ではなく、人びとが気付かない間に進行的に引き起こされた人為的災害として発露していることを指摘した。

最後に結論として、ヴァルザネの水危機をイラン社会全体のなかで捉え直したところ、「水不足」という名分のもとに、ヴァルザネが紡いできた固有な文化や優位性は置き去りにされている状況にあるが、これまでのイラン社会の近代化や発展に伴って乾燥地域に支配的に存在していたカナートをめぐる人間と自然との共存のあり方や、そこに存在していた文化が喪われてきたことに鑑みると、ヴァルザネの事例に関しては、現存する地域固有の生業のあり方や文化を重視し維持してゆけるような仕組みを構築してゆくべきであるし、その重要性に関しても明らかになったと言えるだろう。また、上述の通り、現在のヴァルザネの水危機は「人為的災害」として人々の生活に降りかかっているが、そこにおける水危機をめぐるリスクの変容を「リスク」と「危険」（「決定者・被影響者」）というタームによる理論的説明を試みたところ、現在のヴァルザネの人々は最早、被影響者として「危険」にさらされる状況にあることが示唆された。もともとは豊かであった土地が水の問題によって喪われかけている姿は、これからのイランの水問題の行く末を占うものであると考えられる。ただし、ヴァルザネの人々は現在のような危機的・災害的状況におかれながらも絶望しておらず、今日もあらゆる手立てで地域を存続させようとしていることは見過ごしてはならない点である。ヴァルザネにおいて水危機に抗いながらも生きる人々の姿から示唆される乾燥地における人間と自然との関わりについて、今後は、災害人類学的な視点を持ちつつ、人々の暮らしの日常性のなかから乾燥地域における水の問題に対する減災や防災のあり方として検討してゆくとし、今後の展望とした。（環境行動学）